

「真仏土卷」・「化身土卷」の意義

— 還相表現の視点から —

廣 瀬 惺

はじめに

私は、これまで親鸞の二種回向観について尋ねてきた。その基本内容は、親鸞の表現から見て親鸞の二種回向観には二つの側面があるということであった。一つの側面は、如来の衆生救済のはたらき・構造としての二種回向観であり、今一つの側面は、衆生に利益として与えられる側面としての二種回向観であった。

今、衆生に利益として与えられる側面としての還相回向観について述べるなら、特に、

南無阿弥陀仏の回向の

恩徳広大不思議にて

「真仏土卷」・「化身土卷」の意義

「真仏土巻」・「化身土巻」の意義

二

往相回向の利益には

還相回向に回入せり

往相回向の大慈より

還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば

浄土の菩提はいかがせむ

(正像末和讃)⁽¹⁾

との親鸞の和讃に基づいて、往相の証果の中に衆生としての現実を場として、如来の還相回向成就の本願を尋ねていく歩みとしての生活に与えられる意義であると了解してきたのである。

そして、さらに、そのようにして衆生に与えられる利益としての還相の内実、具体相について、蓮如に始まる教学の集成と言われている「真宗相伝義書」の中の『教行信証』の解釈書である『深解別伝』の、

往相回向の教行信の因によりて満足する真実の証果を顕しましたしおわりて、巻の中間より還相回向の姿を開いて真・化の両巻に広くその相をひらきたまう。⁽²⁾

との文、また同じく、「真宗相伝義書」の中の『広本要訣』の、
真仏土を別して顕したまうは仮の仏土に対するなり。⁽³⁾

と述べられている文、さらには、『六要鈔』の、

証の中に広く真化仏土を撰す。(中略) 往生を以て其の近果と為す。是れ則ち証也。然るに往生の後見る所の身土、解行の異に依って真化有りと雖も、総じて証の中に撰す。⁽⁴⁾

等の文を通して次のごとく了解してきた。

すなわち、これらの文を通して『教行信証』の構造をとらえるならば、「教卷」から「証卷」の往相回向の証果について述べられているところまでが往相回向の因果。次いで、「証卷」に内包して、往相の証果が記された後に、

二つに還相の回向と言うは、則ち是れ利他教化地の益なり。則ち是れ必至補処之願より出でたり。亦一生補処之願と名づく。亦還相回向之願と名づく可き也。⁽⁵⁾

と書き始められて、さらに『論註』からの引文をもって記されている還相回向について述べられた文の一段が原理としての還相回向を表すもの。そして、「証卷」に次いで開かれる「真仏土卷」・「化身土卷」の両卷はセットをなして、その原理のもとに展開される還相回向の意義を有する生活内容を別出して表したものであると了解してきたのである。すなわち、還相の意義を有する生活とは、衆生としての現実を場として仮偽批判即真実の顕彰・真実の顕彰即仮偽批判として展開される生活であり、その生活内容を表現したものが、「真仏土卷」・「化身土卷」の両卷であるということであつた。

この当たりの詳細については、これまでの拙論をお読みいただきたいと思う。⁽⁶⁾今は、以上、本論の論述を了解していただくに必要なと思われる最小限の事柄を記するに止めておくこととする。

本論では、そのような二種回向、特に還相回向の了解を受けて、仮偽批判即真実の顕彰・真実の顕彰即仮偽批判として展開されていく還相の意義を有する生活内容を記している巻として了解される「真仏土巻」・「化身土巻」について、さらにその事の内実・意義を尋ねようとするものである。

ここで、述べるに先立って一つ確認しておかなければならないことがある。それは、今述べたごとく、衆生に利益として与えられる還相回向、すなわち衆生の事としての還相回向とは、往相の証果の光の中に人間としての歴史的社会的現実を場として、如来の還相回向成就の本願を尋ね続けていく歩みであり、その歩みとしての生活に与えられる意義であって、我々の側から自己の還相として主張されるべきものでないということである。衆生の事としての還相とは、どこまでも、本願を尋ねていく歩みに賜る意義なのである。

一

さて、還相回向の生活相が、「真仏土巻」・「化身土巻」の両巻に記されているということであるが、そのことの内容を尋ねていくについて、まず結論的なことを述べておきたい。すなわち、仮偽批判が展開されている「化身土巻」に表わされている世界は還相としての生活の場が述べられているのであり、「真仏土巻」に表わされている世界は、仮偽批判として展開されていく生活の上に、開顕され莊嚴されていく真実なる世界が述べられているのではないかということである。

それでは、まず、「化身土巻」について尋ねていきたいと思う。

親鸞は、「化身土巻」の巻頭に、

無量寿仏觀經の意

邪定聚機

至心發願の願

双樹林下往生

阿弥陀經の意

不定聚機

至心回向の願

難思往生⁽⁷⁾

と標挙の文を記している。この標挙の文は、化身土を成り立たせる原理となる本願を、「至心發願の願」すなわち第九願、及び「至心回向の願」すなわち第二十願であると、また化身土は『觀經』と『阿弥陀經』の意が表わされている世界であることを示している。しかし、そのことはどのようなことを意味しているのだろうか。

そのことを尋ねるについて、曾我量深が次のごとく述べていることが注目される。

方便仮土と穢土とは同じである、浄土の外は穢土、内にては仮土、体は一つ。(中略) 親鸞聖人は内におさめて仮土と云はれた。仮土は娑婆の生活、これを浄土におさめて方便仮土と云はれた。この事は仮身土の巻を見ると明かな事である。
(真宗教学の中心問題)⁽⁸⁾

ここで曾我量深は、穢土そのものが方便化土であると言っているのである。そして、そのことを『教行信証』の「化身土卷」は示していると指摘しているのである。

この指摘を通して了解するならば、親鸞が化身土を第十九・第二十の二願によって成り立っている世界であると言いつつ、また『観経』・『阿弥陀経』の意が表わされている世界であると言っていることの意味を次のごとく了解できるであろう。すなわち、穢土（現実世界）とはどのような世界であるのかというならば、第十九・第二十の二願の世界であり、それらの阿弥陀の願がかけられている世界であることを意味している、と。そしてまた、穢土は、方便の経としての『観経』・『阿弥陀経』を説いた仏陀の大悲がかけられている世界でもある、と。

そのような阿弥陀の本願の、そしてまた仏陀積尊の大悲の内容について、「化身土卷」には、

釈迦牟尼仏、福德蔵を顕説して群生海を誘引し、阿弥陀如来、本誓願を発して普く諸有海を化したまう。既にして悲願います。修諸功德之願と名づく、復臨終現前之願と名づく、復現前導生之願と名づく、復来迎引接之願と名づく。亦至心発願之願と名づく可き也⁽⁹⁾

然れば則ち釈迦牟尼仏は、功德蔵を開演して、十方濁世を勧化したまう。阿弥陀如来は、本果遂の誓いを発して、諸有の群生海を悲引したまえり。既にして悲願います。植諸徳本之願と名づく、復係念定生之願と名づく、復不果遂者之願と名づく。亦至心回向之願と名づく可き也⁽¹⁰⁾

と、第十九願と『観経』、そして第二十願と『阿弥陀経』のそれぞれについて述べられているところである。

そしてまた、さらに注目させられるのが、親鸞が、化身とは何かについて、「化身土巻」の冒頭に、

謹んで化身土を顕さば、仏は『無量寿仏觀經』の説の如し、真身觀の仏是れ也。⁽¹¹⁾

と述べて、『觀經』の真身觀に説かれている仏をもって化身としている事実である。周知のごとく、真身觀の仏は善導によって真の報仏であると決定された仏である。それを今、親鸞は、どのような意をもって化身仏であるとしたのであろうか。恐らく、親鸞は真実に背いて在る仮・偽なる相をとっている穢土の衆生に対して、第十九願・第二十願の方便の二願となって大悲する仏心を真身觀の仏に感得したのではないか。そして、真身觀の仏を化身仏であると決定したのではないか。

因みに、真身觀の經文は次のごとくである。

仏、阿難及び韋提希に告げたまわく、此の想成じ已りなば、次に更に無量寿仏の身相光明を觀ずべし。阿難、当に知るべし。無量寿仏の身は百千万億の夜摩天閻浮檀金色の如し。仏身の高さ、六十万億那由他恒河沙由旬なり。眉間の白毫は、右に旋りて婉轉し、五須弥山の如し。仏眼は四大海水の如し、清白分明なり。身のもろもろの毛孔より光明を演出す。須弥山の如し。彼の仏の円光は百億の三千大千世界の如し。円光の中に於いて、百万億那由他恒河沙の化仏まします。一一の化仏に亦衆多無数の化菩薩まします。以て侍者たり。無量寿仏に八万四千の相まします。一一の相に、おのおの八万四千の随形好まします。一一の好に復八万四千の光明まします。一一の光明遍く十方世界を照らす。念仏の衆生を攝取して捨てたまわず。其の光明・相好及び化仏、具に説く可からず。但、当に憶想して、心眼をして見せしむべし。此の事を見れば、即ち十方一切の諸仏を見たてまつる。諸仏を見たてまつる

を以ての故に念仏三昧と名づく。是の觀を作すをば、一切の仏身を觀ずと名づく。仏身を觀ずるを以ての故に、亦
 仏心を見る。仏心というは大慈悲是れなり。無縁の慈を以てもろもろの衆生を摂す。此の觀を作せば、身を捨てて
 他世に諸仏の前に生じて、無生忍を得。是の故に智者、応当に心を繋けて、諦かに無量寿仏を觀ずべし。無量寿仏
 を觀ぜば、一つの相好より入れ。但、眉間の白毫を觀じて、極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見れば、八万四
 千の相好、自然に當に現ずべし。無量寿仏を見たてまつるは、即ち十方無量の諸仏を見たてまつるなり。無量の諸
 仏を見たてまつることを得るが故に、諸仏現前に授記す。是れを遍觀一切色身想とす、第九の觀と名づく。此の觀
 を作すをば名づけて正觀とす。⁽¹²⁾

この經文には、仏について、「無量寿仏の身は百千万億の夜摩天閻浮檀金色のごとし。仏身の高さ、六十万億那由他
 恒河沙由旬なり」等と説かれて、無限大に近い表現がとられている。しかし、無限大とはいえ、有限数をもって表現さ
 れているのである。ということとは、有限なる世界を生きている衆生に應じた相であることを示すものではないか。そこ
 に親鸞は、衆生に應じている仏の大悲性（第十九願・第二十願として穢土の衆生に願をかけている如来の大悲性）を見
 たのであろう。そして、何よりも、真身觀の仏を象徴する經言は「仏身を觀ずるを以ての故に、亦また仏心を見る。仏
 心というは大慈悲これなり。無縁の慈を以てもろもろの衆生を摂す」である。そこに示されているのは大慈悲心として
 の仏である。ここに、親鸞は第十九願・第二十願の方便の大悲仏となつて穢土の衆生にはたらく仏の大悲性を看取した
 のである。そして、真身觀の仏を化身の仏であると決定したのであると了解される。

また、「化身土巻」は、最後が『華嚴經』の次のごとき文で結ばれている。

若し菩薩、種種の行を修行するを見て、善・不善の心を起こすこと有りとも、菩薩皆撰取せん、と。⁽¹³⁾

この文には、化土が善・不善の心を起こす衆生の世界であることが示されている。すなわち、善の心を起こすとは眞実なる本願に信順することを表わしている。また、不善の心を起こすとは本願に背反することを表わしている。信順する者も、背く者もいる世界が化土であり、それはそのまま穢土であることが示されている。そして、その穢土の衆生はまた、菩薩（法蔵菩薩）によって一人残らず、その在り方にかかわらず完全に撰取され収めとられ、願われている世界であることが示されているのである。

そのような、全てを撰取しようとする法蔵菩薩の願心が最も具体的に表わされている願こそが、方便の願としての第十九・第二十の二願である。その意味において、穢土こそは、この二願によって目覚めが願われ待たれている世界としての方便化土なのである。

以上のごとくして、化土とは穢土であり、親鸞は穢土を仏の大悲がかけられている世界として了解していたと言えるであろう。その意味において、私は、「化身土巻」は、還相回向成就の本願を尋ねて歩む還相としての意義が与えらるる身を生きたる親鸞が、自らが身を置いている世界を正しく仏によって大悲されている世界として、その大悲心との深い感応の中で活写した巻であると了解できるのではないかと思うのである。

ここで、駄言になろうかと思うが、一言付言しておかなければならないことがある。それは、化土が阿弥陀の第十九・第二十の二願、そして仏陀釈尊の『観経』・『阿弥陀経』の大悲がかけられている世界としての穢土を意味しているとするなら、「化身土巻」の末巻はどうなるのかという問題である。「化身土巻」の末巻は、仮なる世界が描写されている

「化身土卷」の本巻に対して、偽なる世界として、さまざまな神祇や迷信、そして外道の思想等が課題として取り上げられている。それらは、阿弥陀の第十九願・第二十願、そして仏陀の『観経』・『阿弥陀経』の域を越えていないかという問題である。

その疑問については、親鸞はそのような偽なる世界を第十九願の世界に、また『観経』の世界に包括していたと了解出来るであろう。『一念多念文意』の次の文はそのことを示している。

異学というは、聖道外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。これらはひとえに自力をたのむものなり。⁽¹⁴⁾

ここで親鸞は、「吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむ」偽なる在り方について、第十九願に包括される聖道の延長上のもものとして位置づけているのである。であるとすれば、「化身土卷」は末巻を含めて、第十九・第二十の方便の二願、そして、『観経』・『阿弥陀経』の方便の経を説かなければならない仏陀によって大悲されている世界としての穢土を活写したものであると言えるであろう。そして、その世界は、親鸞自身が身を置いている衆生としての現実界であり、還相としての生活の場を記したものである。

二

では、「真仏土卷」とはどのような巻であるのか。「化身土卷」が、還相回向成就の本願を尋ねて歩む、その歩みの場

が表わされている巻であるのに対して、そこを場とする歩みのところに開かれ、荘嚴されていく真実なる世界としての報土が表わされている巻であると言えるのではないか。

ここで、まず注意をおこななければならないことは、「証巻」に記されている往相の果としての証果との異なりである。勿論、どちらも同じく本願に依って開かれる世界であり、信仰者の現実としてはそれほど明確に区分されるものではないであろう。何故ならば、往相回向の本願を尋ねて歩む歩みと、往相の証果の中に還相回向成就の本願を尋ねて歩む歩みとは、決して歩む人自身において明瞭に区分されるものではないからである。往相回向の本願を尋ねて歩む歩みが、そのまま還相回向成就の本願を尋ねていく歩みでもあり、また還相回向成就の本願を尋ねて歩む歩みが、そのまま往相回向の本願を尋ねて歩む歩みでもあるのである。相互に重なっているのである。一応、分位として自己一人の救いを求めて本願を尋ねる歩みを往相、往相の証果の中に、衆生としての現実を場として本願を尋ねて歩む歩みを還相と区分するのである。である限り、往相の果として「証巻」に説かれる世界と、還相の生活に開かれる果として「真仏土巻」に説かれる世界とを、事実としては明確に区分することは出来ないのである。

そのことは、「証巻」・「真仏土巻」が共に同じく涅槃界として示されていることによって、また同内容の文が記され、特に、「証巻」・「真仏土巻」の両巻に、次の二文が共通して引文されていることによっても知られるであろう。

莊嚴清淨功德成就は、偈に觀彼世界相 勝過三界道の故にと言えり。此れ云何ぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就るありて、亦彼の浄土に生まるることを得れば、三界の繫業畢竟して牽かず。則ち是れ煩惱を断ぜずして涅槃分を得、いづくぞ思議すべきや。

(論註の引文)⁽¹⁵⁾

西方寂靜無為の樂には、畢竟逍遙して、有無を離れたり。大悲、心に薰じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること、等しくして殊なることなし。或いは神通を現じて法を説き、或いは相好を現じて無余に入る。変現の莊嚴意に随いて出ず。群生見る者、罪みな除くる、と。又贊じて云わく、帰去来、魔境には停まるべからず。曠劫よりこのかた六道に流転して、尽くみな径たり。いたるところに余の樂なし、ただ愁歎の声を聞く。此の生平を畢えて後、彼の涅槃の城に入らん、と。

(定善義の引文)⁽¹⁶⁾

しかし、義をもってそれぞれの意義の上からその差異を明確に区分するなら、「証巻」に記されている世界が、一人ひとりに開かれていく浄土であるのに対して、「真仏土巻」に記されている浄土は、人間として、この世界（穢土）を場として本願を尋ねていく歩みの所に開かれていく世界であると言えるのではないか。その意味において、「真仏土巻」に記されている浄土は、個人性を超えてより深広なる世界としての浄土であると了解することが出来るのであろう。

そこに注目されるのが、次のごとき曾我量深の指摘である。

単なる往相的人生の終極としての大自然と、還相的人生の淵源としての大自然と、此二箇の自然は嚴然として区別するを要する。往相作願の対象としての法性の浄土と、還相觀察の対象としての方便莊嚴の報土とを混同してはならぬ。

(大自然の胸に)⁽¹⁷⁾

ここで、曾我量深は往相の果として「証巻」に説かれている浄土が「法性の浄土」であり、「還相觀察の対象」、すなわち還相の歩みにおいて見いだされる「真仏土巻」に説かれる浄土こそが真実なる莊嚴の世界としての報土であると指摘しているのである。

まさしく、往相の証果は往相回向の本願に値遇する一人ひとりに開かれる世界として、莊嚴浄土の世界というよりも、むしろ涅槃界、すなわち仏智の境界であるという方がふさわしいのではないか。そのことは、「証巻」に記されている証が、

設い我仏を得たらんに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずは、正覚を取らじ、と。⁽¹⁸⁾

との、第十一願証大涅槃の願に基づくものであるとされていることによっても知られるところである。それに対すれば、莊嚴される世界としての報土の報土たる所以は、むしろ還相において莊嚴されていく真仏土にこそあると言えるのではないか。

本願莊嚴の浄土について、世親は、『浄土論』において器世間（環境）と衆生世間の二世間を内容とする世界であることを明らかにしている。すなわち、浄土の浄土たる所以は、一人に開かれる境（仏智の世界）であるというよりも、環境があり、衆生（聖衆）がいる世界であることを明らかにしているのである。そうであるとするなら、莊嚴浄土の世界とは、衆生としてのかかわりを場とする歩みのところに開かれてこそ、そのような世界としての浄土であり得るのではないか。報土の報土である所以は、人間としてのかかわりの中にあって本願を尋ねて歩む還相の生活においてこそ、その所以があると言わなければならないのである。

曇鸞が『論註』において、世親が表わした浄土の二十九種莊嚴の一事について解釈をしていくのに、人間としての生活における問題と離さずに解釈をしていっていることが注意されなければならない。単に、一人の信仰体験の域にとどまるものではないのである。

ここに注目されることがある。それは、真仏土が第十二の寿命無量の願と第十三の光明無量の願に酬報された（こたえた）世界であると示されている事実である。本願を尋ねていく歩みのところに開かれていく世界ならば、第十二願・第十三願に酬報された世界であるというよりも、第十八願、あるいは衆生にかかわる本願にこたえた世界であるという方が適切ではないか。そして、確かに一面、親鸞は「真仏土巻」の最後には、

選択本願の正因に由って、真仏土を成就せり。⁽¹⁹⁾

と記して、真仏土が選択本願、すなわち第十八願によって成就された世界であるとも述べているのである。

しかし、親鸞は、「真仏土巻」の巻頭には標拳の文として第十一・第十二の二願を挙げ、「真仏土巻」の本文の冒頭には、

謹んで真仏土を按ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土は亦是れ無量光明土なり。然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に、真の報仏土と曰うなり。既にして願います、即ち光明・寿命之願是れ也。⁽²⁰⁾

と記しているのである。そのこと、すなわち身仏土が第十二・第十三の二願に酬報された世界であるとされていることは何を意味しているのであろうか。

曾我量深の、次のごとき指摘がある。

第十八願といへどもその救済の願の当分の相としては、衆生の乃至十念の念仏に依って感見往生すべき仏と浄土とは直に以て真仏土と決定することは出来ない。衆生が衆生として生るべき浄土がどこまでも方便化土の相状を帯びて居ることは止むを得ないことである。衆生が念仏の信に因りて真仏土に往生するといふことは決して第十八願の

当分ではなくして、更にそれを裏づける第十七諸仏称名の願に依ってでなければならぬ。祖聖が十八願の信心から十七願の名号を開き、更にこの名号に依って光明、寿命を開出して、真仏土を建設せられたのは是の所以である。誠に真仏土は如来の自証の境界であり、その名号もまた諸仏のみ称讃したまふ大行とせられてある。

(弥陀と諸仏)⁽²¹⁾

ここで言われていることの詳細は、直接曾我量深の著をお読み頂きたいと思う。今は、論の流れの上で私がこの文を通して学ばせられたことを述べるに止めておきたい。

ここで、曾我量深は真仏土が第十二・第十三の二願によって建立される世界であることの所以が、真仏土の絶対の純粹性に基づくことを指摘している。そして、真仏土が如来の自証の境界であると述べているのである。しかし、それにして、如来の自証の境界であるとはどのようなことであるのか。そのことの意味が、単に如来のみによって観見される世界であるとするなら、我々衆生とは全く関係のないことになってしまうのではないか。そうではあるまい。私はそのことの意味を次のように了解するのである。

すなわち、還相の歩みのところに莊嚴されていく浄土は我々において予期される世界でも、また把握され得る世界でもない。我々においては、どこまでも往相の証果の光の中に還相回向成就の本願を尋ねて歩む、すなわち、仮偽批判即真実の顕彰・真実の顕彰即仮偽批判なる歩みを衆生としての現実を場として歩む以外にはないことである。そして、そのような歩みの所に我々の個人意識を超えて莊嚴され、実現されていく世界としての浄土が真仏土であるということである、と。さらに言えば、個人の上というよりも、衆生としての現実の上に、その現実を超えて開かれていく

世界であると言えるのではないか。親鸞が、衆生の一人一人にということではなく歴史上に阿弥陀が自己を表現することを願事とする第十七願と並んで、第十二・第十三願について、特に「大悲の願」と記していることも、そのように個人を超えて、歴史的現実とのかかわりにおいて、浄土が押さえられているのであると考えられるのである。

三

以上述べてきたごとく、「真仏土巻」に明らかにされている真仏土が仮偽批判即真実の顕彰・真実の顕彰即仮偽批判として歩まれていく還相としての意義を持つ生活のところには個人性を超えて莊嚴され開かれていく世界であり、また「化身土巻」に明らかにされている化身土がその歩みの場であると了解するのであるが、そのことを示していることの一つとして、「真仏土巻」・「化身土巻」の発端の詞を挙げておきたいと思う。

『教行信証』六巻の各巻、及び三序には、それぞれに発端の詞が置かれている。それは、単に形式的な意味において置かれているのではない。『教行信証』が単なる観念の書ではなく、身をもって記された実践の書であり、行的な書であることを表わしているのである。その意味において、各巻、及び三序に記される内容は、その巻の冒頭に置かれている発端の詞のごとき姿勢によって、初めて明らかにされる事柄であることが意味されているのである。今、序文については置いておくとして、六巻の発端の詞を見るならば次のごとくである。

「教 卷」……………謹按（謹んで按ずるに）

「行 卷」……………謹按

「信 卷」……………謹按

「証 卷」……………謹顯（謹んで顯さは）

「真仏土卷」……………謹按

「化身土卷」……………謹顯

このように、「教卷」・「行卷」・「信卷」・「真仏土卷」が「謹按」、 「証卷」・「化身土卷」が「謹顯」となっている。

『大漢語林』（大修館書店刊）によると、「按」には、「おさえる・なでる・やすんずる・しらべる・かんがえる・ならべる」の意味があることが記されている。また、「顯」には、「あきらか・あらわれる・あらわす・あきらかに」の意味があることが記されている。そこから伺えることは、「謹按」を発端の詞として書かれている巻の内容は、その事柄（「教卷」では浄土真宗・「行卷」「信卷」では往相の回向・「真仏土卷」では真仏土）をよくよく吟味し、思いめぐらすことによって明らかにされてくる事柄であるということである。それに対して、「謹顯」を発端の詞として書かれている巻の内容は、よくよく吟味することによって明らかにされる事柄ではなく、それ（「信卷」では真実証・「化身土卷」では化身土）が既に了々と顯現されている事柄であることを示していると了解される。

今特に、同じく果位としての意義を持つ巻である「証卷」・「真仏土卷」・「化身土卷」を対比するに、「証卷」と「化身土卷」が「謹顯」であるのに対して「真仏土卷」のみが「謹按」となっているのである。そのことは、それぞれの巻

に表わされていることの意義を知る上で注意されなければならないであろう。それぞれの果位の持つ位置づけを示しているものであると了解できるからである。

まず、「証巻」と「化身土巻」が「謹顕」になっていることの意味であるが、「証巻」に明らかにされる往相の証果は、往相回向の本願との値遇のところに一人一人の上に開かれる境界であるが故に、按ぜられることによって明らかにされるものではなく、現に開かれている世界であり、その世界をそのままに記したのが「証巻」であることを表わしている。また、「化身土巻」は、如来の還相回向成就なる本願を尋ねていく場として仏によって大悲されている穢土なる世界が記されている巻であり、現に今身を置いている世界であるが故に按じて記されるべき世界ではないことを表わしているのである。

では、「真仏土巻」は何故「謹顕」ではなく「謹按」なのか。そのことについては、先に述べたごとく、真仏土が、我々にとって明らかに了々と顕現されている世界ではなく、どこまでも衆生としての現実を場として本願を尋ねていく歩みの生活に個人意識を超えて開かれ莊嚴され続けていく世界であることを表わしているのではないか。その世界を、今、親鸞が「謹んで按じて」記したのが「真仏土巻」であるということである。

まさしく、「証巻」に記されている往相回向の果である証が、一人ひとりの上に往相回向の本願によって了々と表わされていく世界であるのに対して、「真仏土巻」に記されている浄土は、衆生としての現実を場として本願を尋ねていく歩みのところに、還相回向成就の本願によって期せずして歴史的現実の場にそのことを超えて莊嚴され展開されていく深広なる世界なのである。

註

- (1) 『定本親鸞聖人全集』二(和讃篇) 一八三頁
- (2) 『真宗相伝義書』三一六二頁
- (3) 『真宗相伝義書』三一一九七
- (4) 『真宗聖教全書』二一二二二頁
- (5) 『定本親鸞聖人全集』一一二〇一頁
- (6) 「同朋仏教」(同朋大学仏教学科刊) 第二〇・二二合併号所収「親鸞の二種回向観」・「真宗研究」(真宗連合学会刊) 第三七輯所収「親鸞の還相回向観」等参照
- (7) 『定本親鸞聖人全集』一一二六八頁
- (8) 『真宗教学の中心問題』一九頁
- (9) 『定本親鸞聖人全集』一一二六九頁
- (10) 『定本親鸞聖人全集』一一二九五頁
- (11) 『定本親鸞聖人全集』一一二六九頁
- (12) 『真宗聖教全書』一一五六頁
- (13) 『定本親鸞聖人全集』一一三八三頁
- (14) 『定本親鸞聖人全集』三(和文篇) 一四二頁
- (15) 『定本親鸞聖人全集』一一一九八頁及び二五〇頁
- (16) 『定本親鸞聖人全集』一一二〇〇頁及び二六二頁
- (17) 『曾我量深選集』三一二〇四頁
- (18) 『定本親鸞聖人全集』一一一九六頁等
- (19) 『定本親鸞聖人全集』一一二六五頁
- (20) 『定本親鸞聖人全集』一一二二七頁

「真仏土卷」・「化身土卷」の意義

「真仏土卷」・「化身土卷」の意義

(21) 『曾我量深選集』四―七三頁